特 集 編

都市と農村の交流
～20年の歩みと新たなる挑戦～

農林水産省
九州農政局

都市と農村の交流

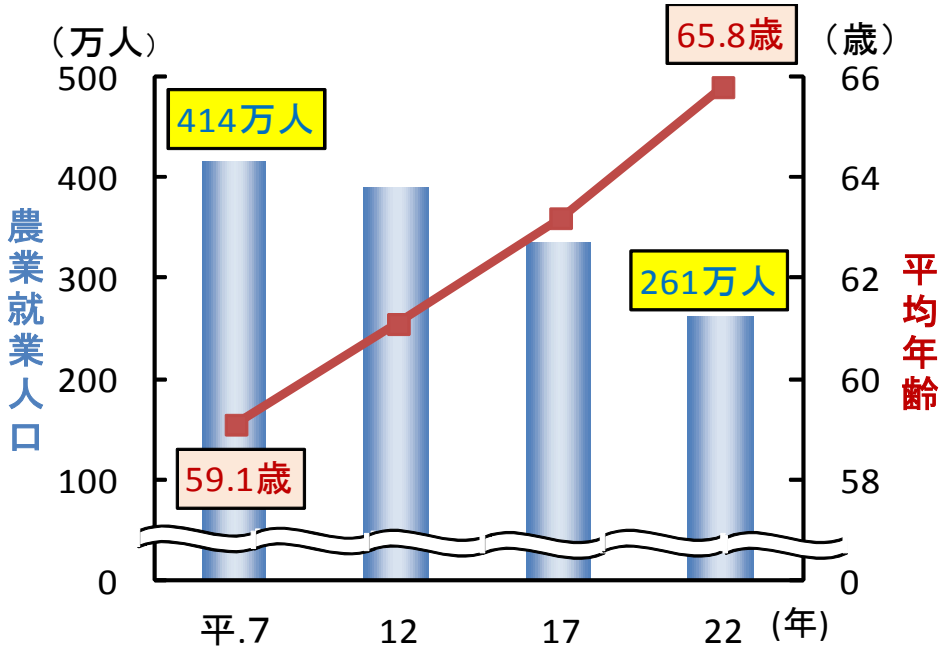
第1章	• 九州の都市農村交流の取組状況や特徴について、統計や年表を交えて整理。 • 九州新幹線の全線開業や、九州への外国人入国者の増加など、都市と農村の交流に影響を与える新たな動きを紹介。 • 九州各県や市町村の動きを、アンケート調査結果を踏まえて紹介。
第2章	• 都市と農村の交流の課題について、関係者等へのアンケート結果も踏まえて整理。
第3章	• 今後の対応策や展開方向を、「地域をみがく」「人材を育てる」「魅力を伝える」「パートナーとつながる」という4つのキーワードに沿って提案。 • あわせて九州各地域の先駆的な取組等を紹介。

１　九州の都市と農村の交流の特徴　①

本文ｐ16～32

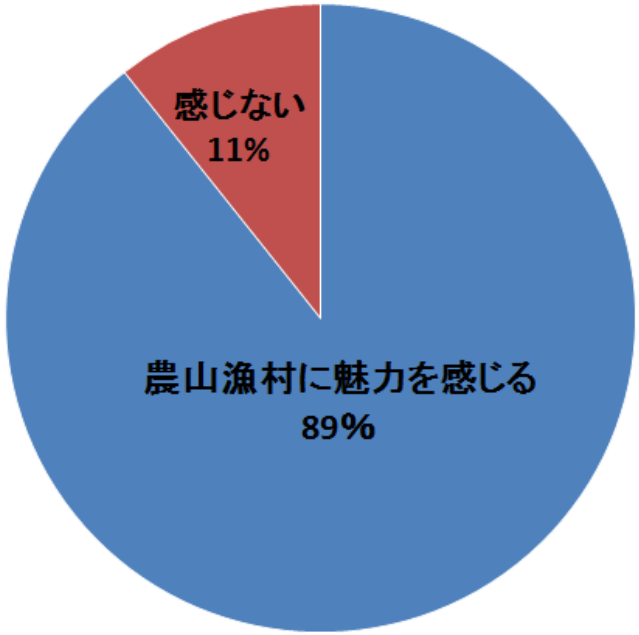
- 農村では、高齢化や集落内人口の減少、農地の荒廃等により低下した地域の活性化や集落機能の維持・改善が課題。
- 一方、都市部では、農村に癒しや安らぎを求める傾向。
- こうした農村と都市の関心の一致により、「都市と農村の交流」が進展。

○　農業就業人口の減少と高齢化の進展



資料:「農林業センサス」

○　余暇（休日）を過ごす場所（訪れる場所）としての農山漁村の魅力



資料:「消費者モニターアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

１　九州の都市と農村の交流の特徴　②

本文ｐ16〜32

- 九州には、多様で美しい景観や郷土文化、四季を通じて豊富な農林水産物などの魅力あふれる農村が至る所に存在。
- これらの田舎の魅力“田舎力”を活かした都市と農村の交流が積極的に展開。

１　九州の都市と農村の交流の特徴　③

本文ｐ16～32

【直売所や農家レストラン】

- 地元の旬の農産物や特産品の直売や、それらの素材を活かした農家レストランが盛ん。

【体験学習等】

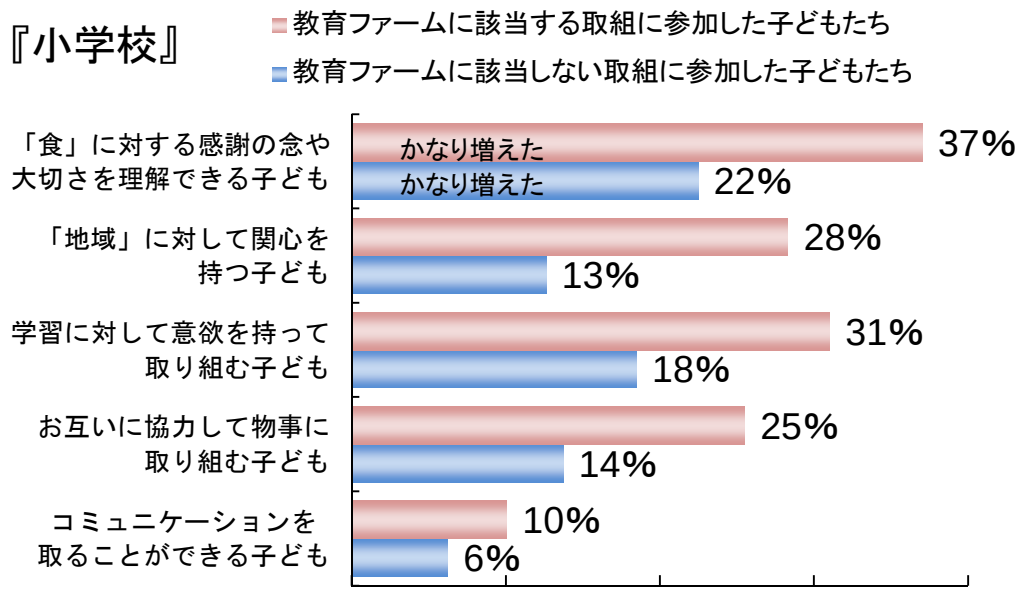
- 近年、農村での生活体験や交流による教育的な様々な効果が注目。

○　産地直売所の推移

区分	九州計	全国
平.22	1,871	16,816
平.17	1,426	13,538
平.22/平.17	131%	124%

資料:「農林業センサス」

○　教育ファームによる子ども達への効果



資料:「九州各県小・中学校アンケート調査結果」(平成22年度実施)

１　九州の都市と農村の交流の特徴　④

本文ｐ16～32

【農家民宿等】

- 九州では、農家民宿を行う経営体が大きく増加。
- その背景は、安心院町の農家民泊や西米良村のワーキングホリデー、大分県による農家民宿等の規制緩和等、先駆けとなる優れた取組があったことや、教育旅行等の滞在型体験学習の受入れが進んだことなど。

【人材育成】

- 九州グリーン・ツーリズムシンポジウムの開催や九州ツーリズム大学の開校等、人材育成やネットワークの構築などの取組が活発で、各地で多くの担い手やリーダーが活躍。

○　農家民宿の推移

区分	九州計	全国
平.22	309	2,006
平.17	115	1,492
平.22/平.17	269%	134%

資料:「農業センサス」

○　九州ツーリズム大学

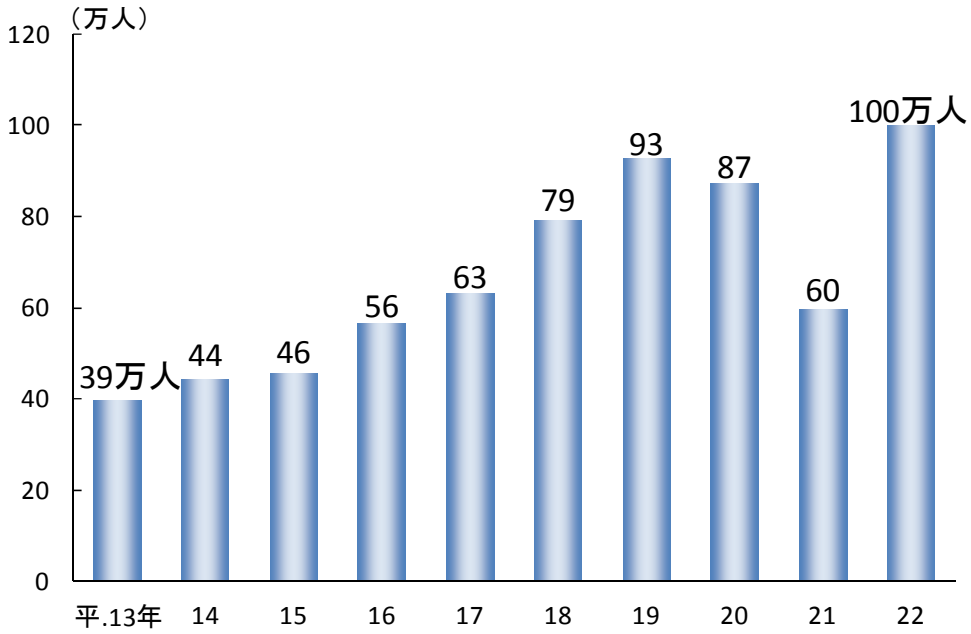
- 平成９年、熊本県小国町に創設。
- 月１回（週末を含む３日間）、１年間のカリキュラム。
- これまで2，１００人の人材を輩出。

２　都市と農村の交流に影響を与える新たな動き

本文ｐ34～37

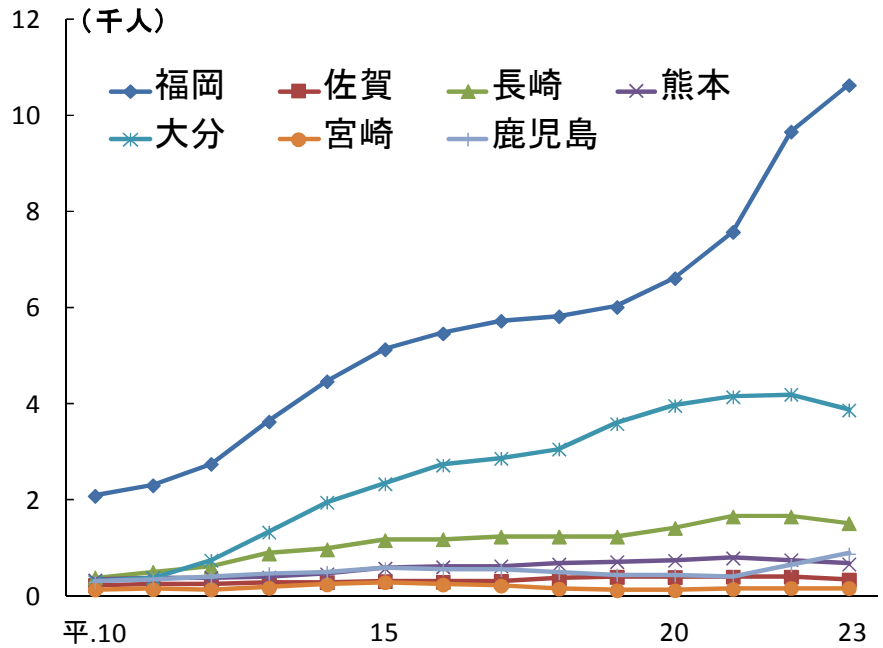
- 九州新幹線の全線開業後、関西方面からの観光客や修学旅行客の増加など一定の効果。また、新幹線と観光地等を結ぶ二次交通網も展開。
- アジアをはじめ外国人旅行者や留学生が増加。その中で、海外からの教育旅行の積極的な受入の動きも。

○　九州の外国人入国者数の推移



資料：法務省「出入国管理統計年報」より作成

○　九州の留学生数の推移



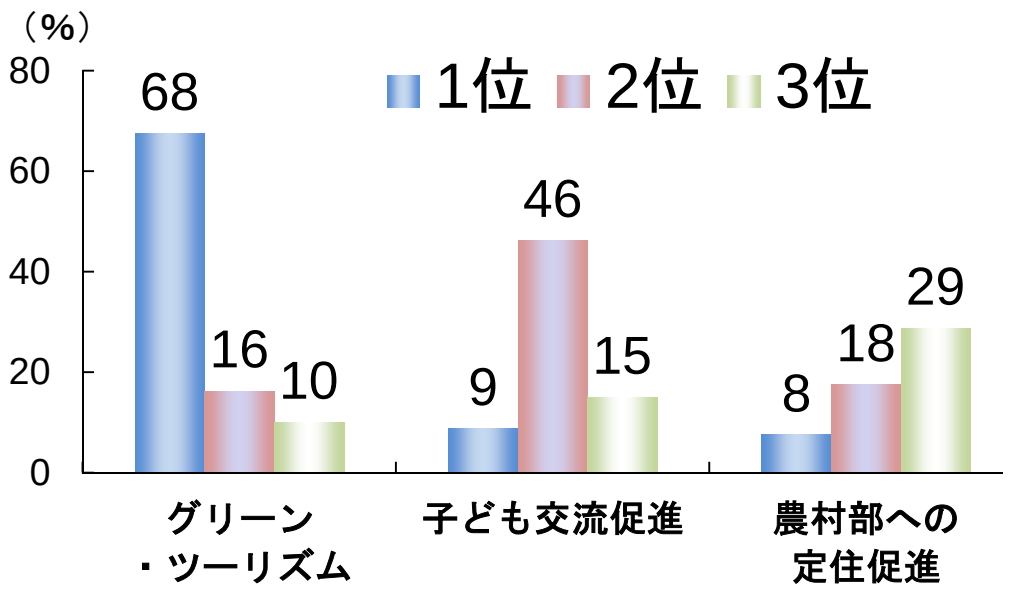
資料：(独)日本学生支援機構「外国人留学生在籍状況調査結果」より作成

３　九州各県と市町村の動き

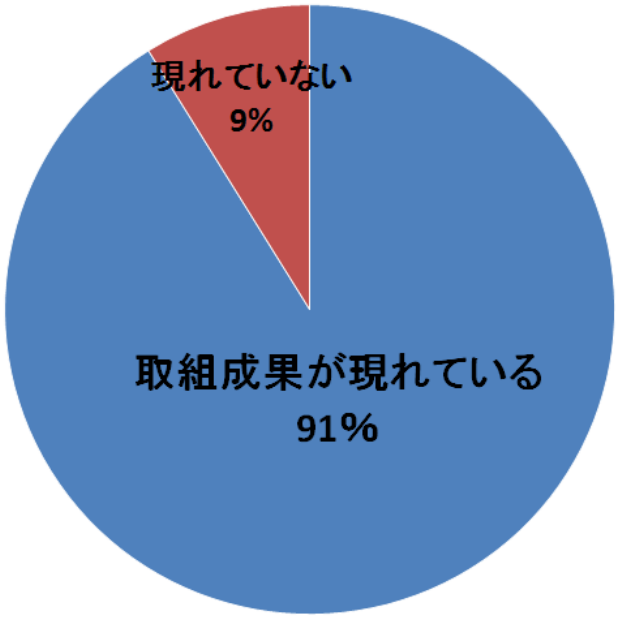
本文ｐ37～40

- 県や市町村の多くが、グリーン・ツーリズムを農村振興策として掲げ、「グリーン・ツーリズム」、「子ども交流促進」等の取組を積極的に推進。
- 取組により、都市と農村の交流に一定の効果が現れていると評価する一方、推進体制の整備・強化といった課題も。

○「都市と農村の交流」で市町村が力を入れている取組　（順に3つ選択）



○　市町村の「都市と農村の交流」の取組成果



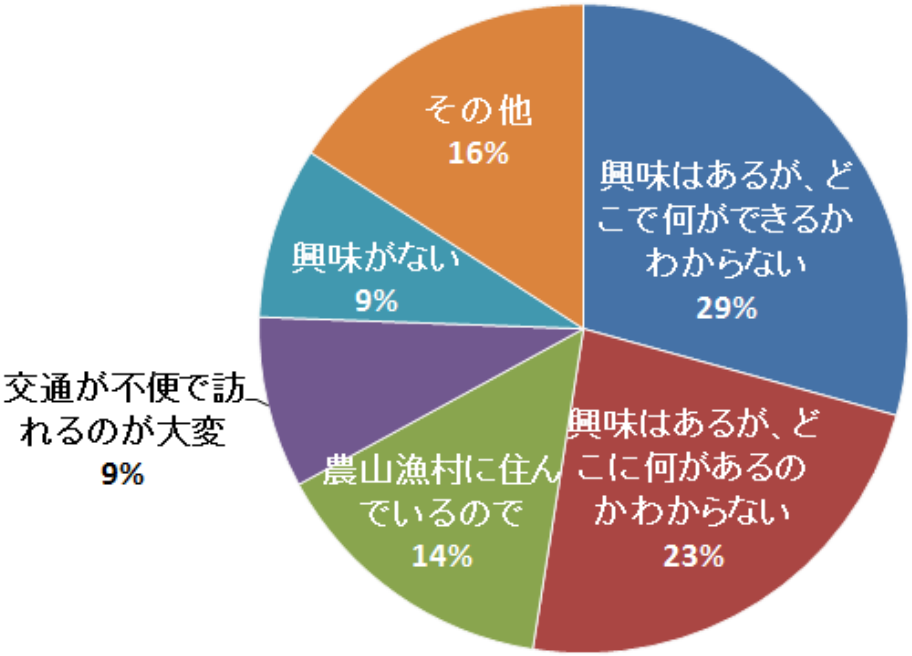
資料：「市町村へのアンケート調査結果」（平成24年1月～2月実施）

１　農村への訪問①

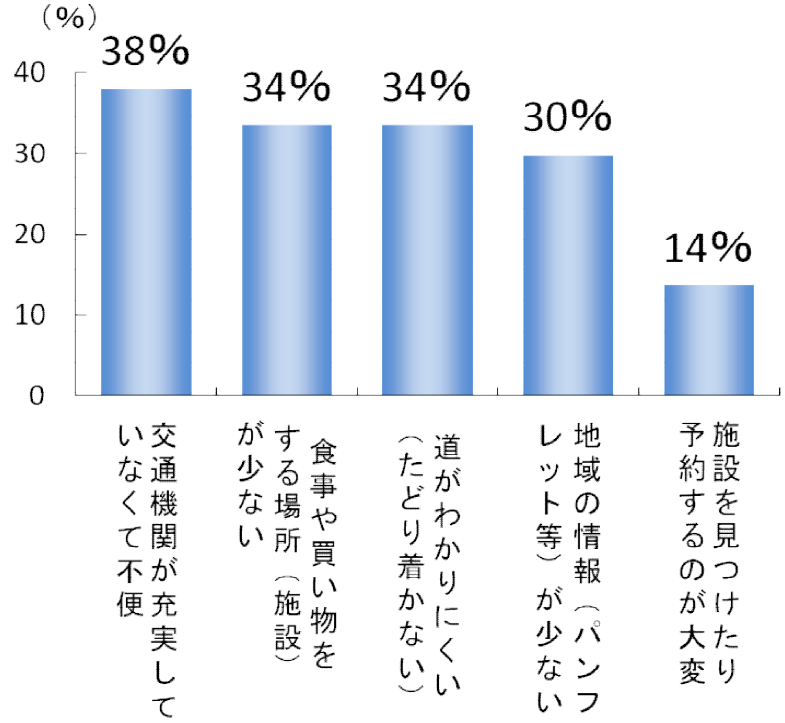
本文ｐ41～46

- 都市住民の多くは、農村に魅力を感じているが、「どこで、何ができるのか」など、地域の具体的情報が十分に伝わっていない状況。
- また、訪問したことがある人でも、「道がわかりにくい」など、地域の情報が不足していると認識。

○　農山漁村を訪れない理由



○　農山漁村を訪れた時に困ったこと（複数回答）



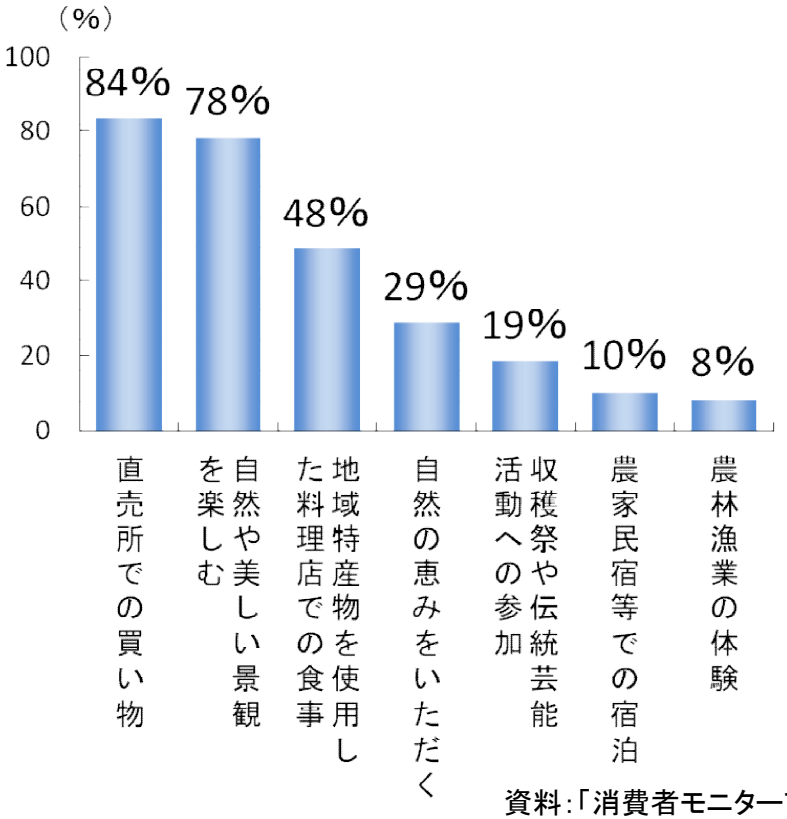
資料：「消費者モニターアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

１　農村への訪問②

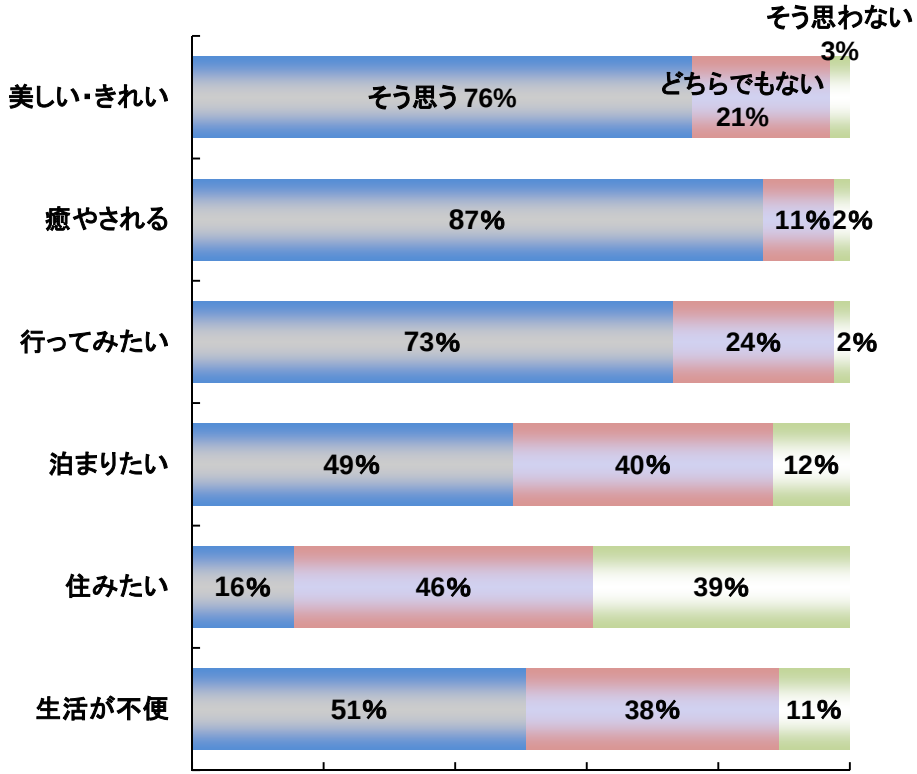
本文ｐ41～46

- 農村を訪れる目的は、「直売所での買い物」や「自然景観を楽しむ」が多く、宿泊や体験に結びついていない状況。
- 一方で、消費者の約半数が農山漁村に「泊まりたい」との感想。

○　農山漁村を訪れる主な目的（複数回答）



○　消費者の農山漁村に対する感想



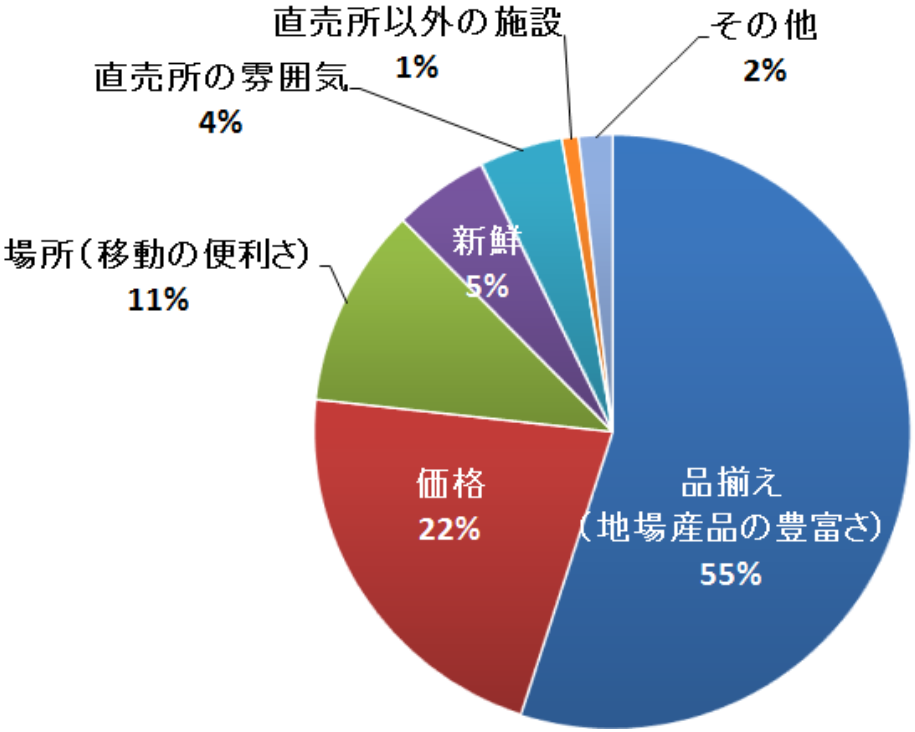
資料：「消費者モニターアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

２　直売所の利用

本文ｐ47～48

- 直売所では地域の特徴を出し、独自性・付加価値のある商品の開発・販売に努力。
- 利用者も、「ここにしかないという独自性あるものをそろえてほしい」など、価格よりも品ぞろえを重視。

○　利用者が直売所選びで重視する点



資料:「直売所利用者へのアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

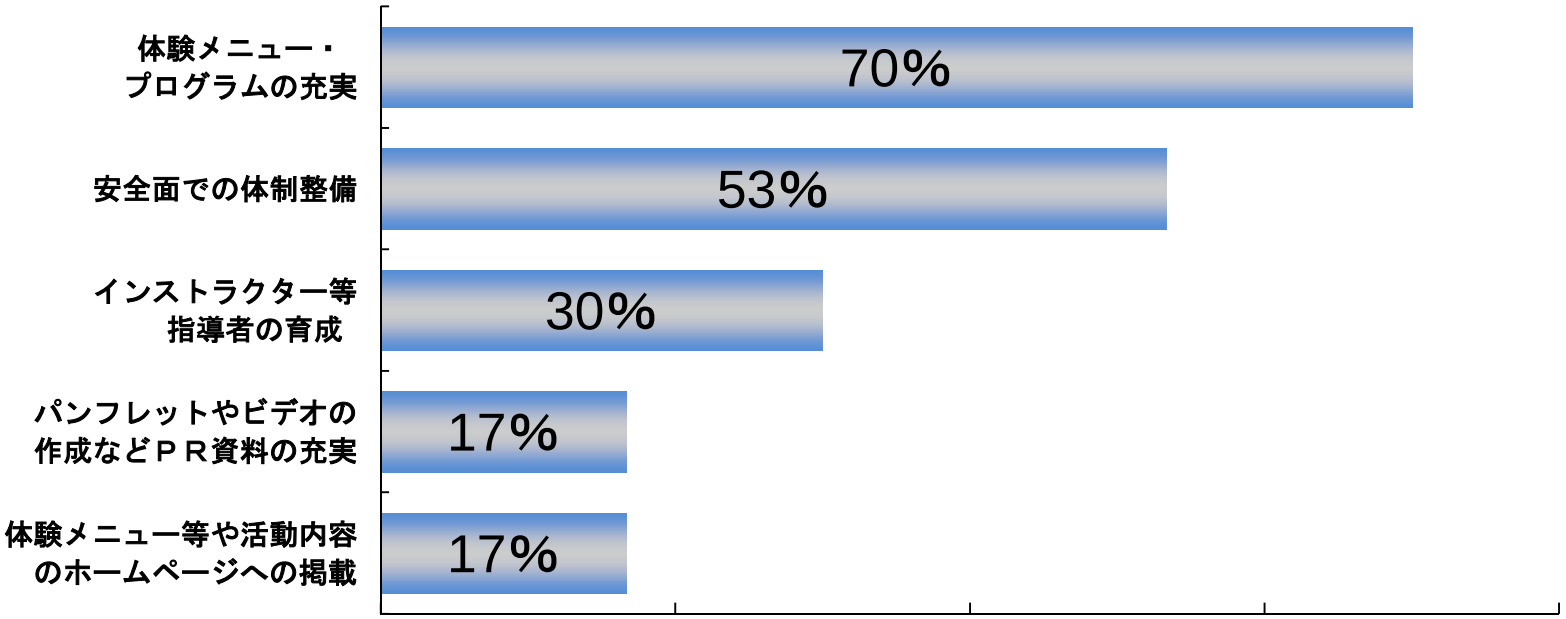
福岡県八女市の道の駅たちばな「夢実館そろり」

３　農作業・農産加工の体験

本文ｐ48～49

- 体験学習の受入側は、体験メニューの充実に努力。
- 体験側（学校）の多くは、効果を得られたとしているが、さらなるメニュー開発・充実を求める声。
- 一方、「安全面での体制整備」、「インストラクター等の指導者の育成」も課題。

○　今後、体験学習（教育旅行等）を行うにあたり受入先に求めるもの。（複数回答）



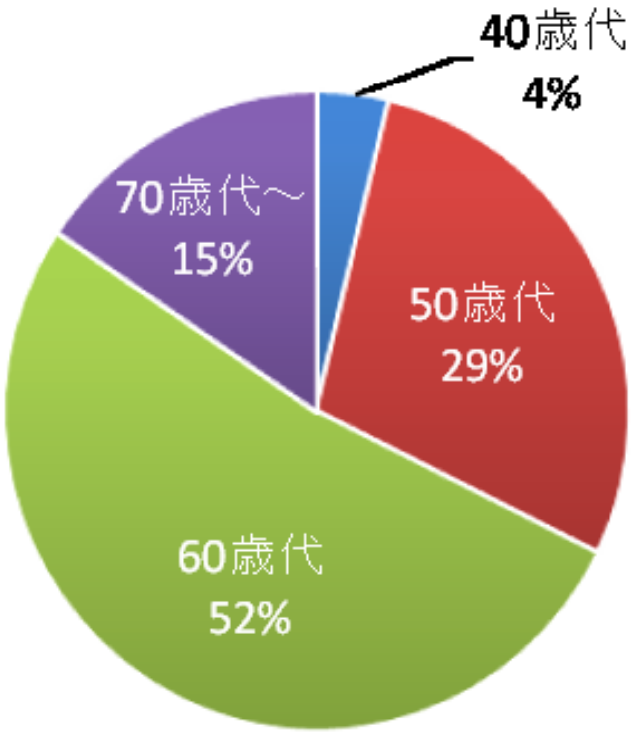
資料：「体験学習実施校へのアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

４　農村での宿泊、滞在等①

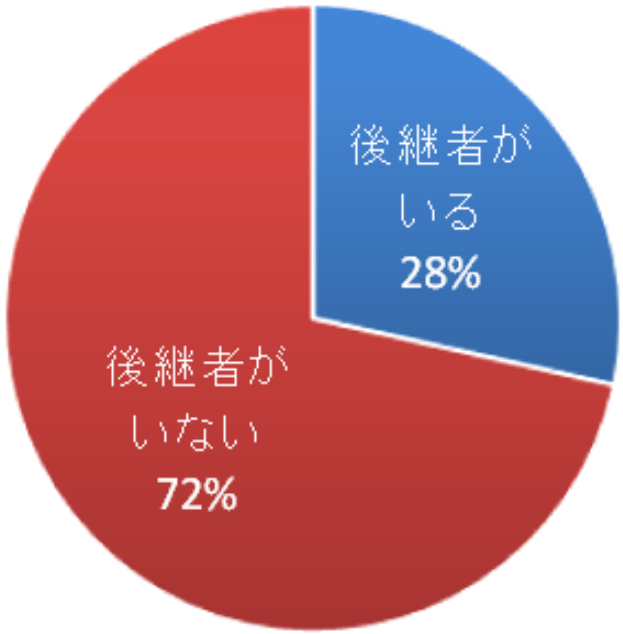
本文ｐ50～54

- 農家民宿等の経営者は、7割が60歳代以上。後継者がいるところは3割にとどまっており、後継者の確保が大きな課題。
- さらに、経営（運営）にあたって、「安全への配慮（事故・食中毒など）」や「PR方法」等に苦労。

○　農家民宿等の経営者の年齢



○　農家民宿等の後継者の有無



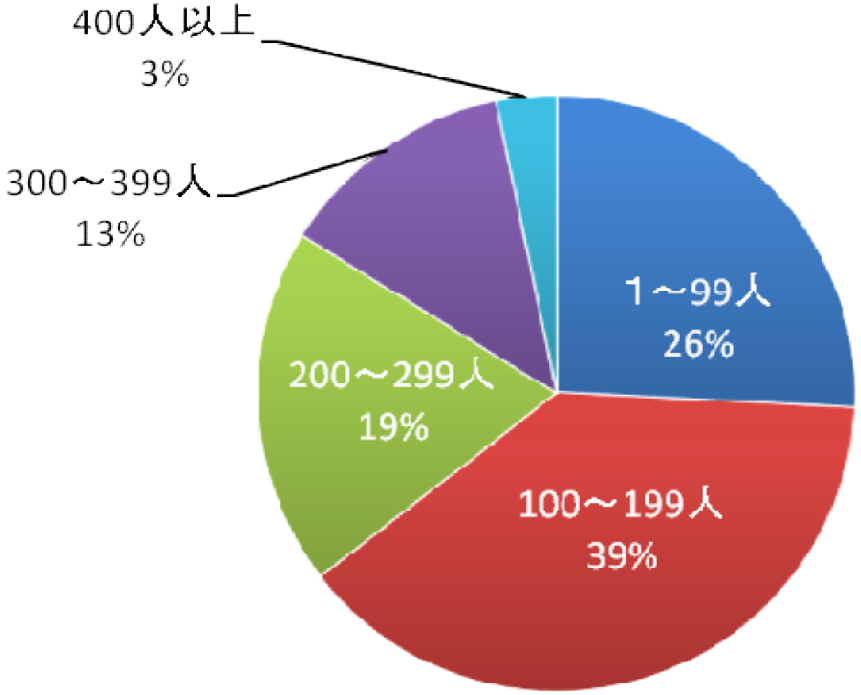
資料：「農家民宿等実践者へのアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

４　農村での宿泊、滞在等②

本文ｐ50～54

- 小規模の受入協議会も多く、一定規模以上の受入体制の整備や、近隣の受入地域と共同するなどの柔軟な受入体制づくりが必要。
- 多くの受入協議会が、海外からの教育旅行受入を検討したいとしているが、「言葉の問題」や「誘致活動方法がわからない」等といった課題も。

○　農林漁業の体験学習（教育旅行等）の宿泊受入可能人数



資料：「体験学習受入協議会へのアンケート調査結果」（平成23年11月～12月実施）

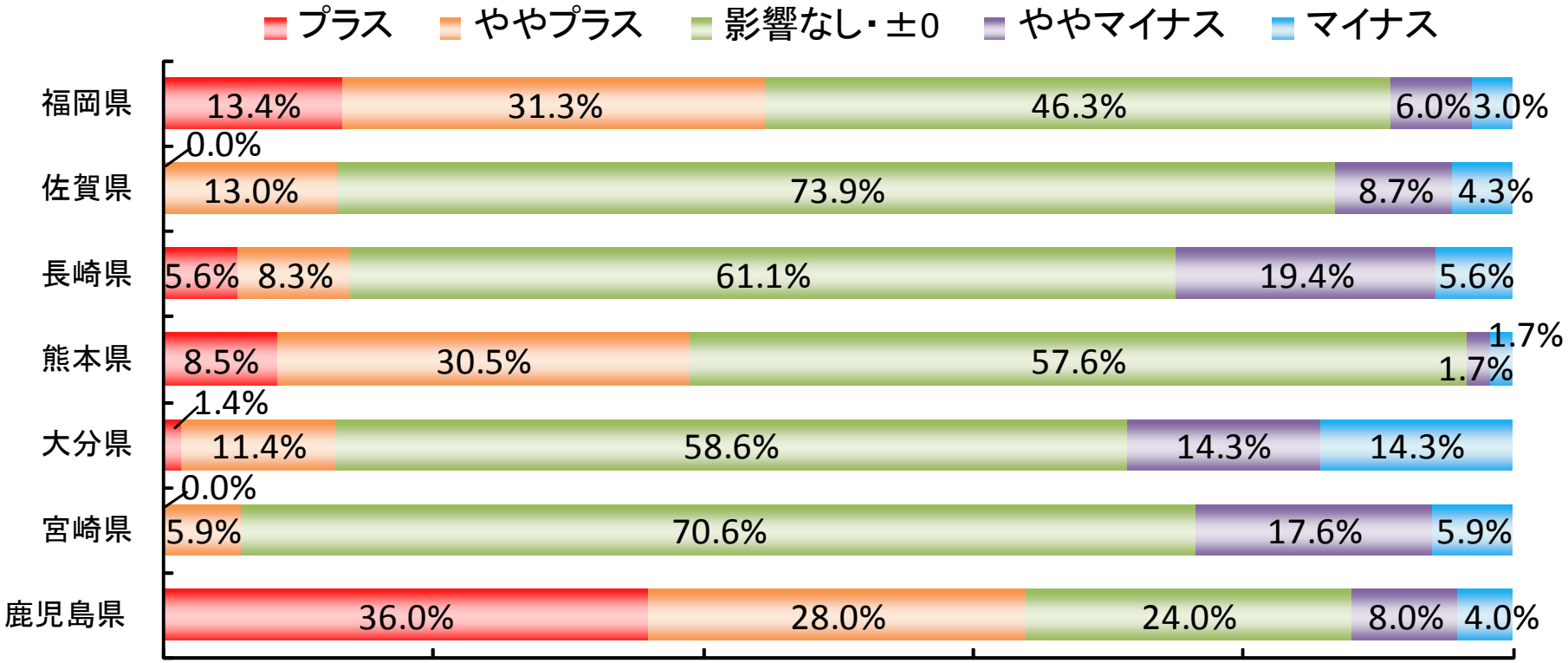
熊本県阿蘇市での体験学習の様子

５　新幹線の活用

本文ｐ54～55

- 九州新幹線全線開業による効果は、沿線や地域によって偏り。
- 農村部までの二次交通の不便さや、アクセス情報の不足に課題。
- 体験学習において新幹線を利用した学校の割合は16%。

○　九州新幹線全線開業による売上への影響



資料：九州経済調査協会「九州新幹線全線開業後の業況に関するアンケート」（平成24年1月～2月実施）

（メモ）

１　地域をみがく①

本文ｐ56～61

- 農村にある地域資源の掘り起こしや伝統文化の継承等、「地域をみがく」こと、田舎の魅力“田舎力”を持ち続けることが重要。

“地域をみがく”挑戦

- ➢ 地域の魅力を発掘し、それを地域マップ等にして多くの人に届ける。
- ➢ 地域の女性の力も活用して郷土料理の継承や、地場農産物を用いた農産加工品の開発に取り組む。

訪問者が作成する地域の絵地図（村丸ごと生活博物館）

おがわ作小屋村の名物「おがわ四季御膳」

１　地域をみがく②

本文ｐ56～61

“地域をみがく”挑戦

- 集落・地域ぐるみの取組に、都市部の住民やボランティア等を巻き込んだ形で伝統文化の継承や環境保全に取り組む。
- 教育効果の高い、より充実した体験メニュー・プログラムの整備・拡充に取り組む。

高千穂の夜神楽

棚田を散策した後、メダカの観察（日置市の尾木場集落）

２　人材を育てる①

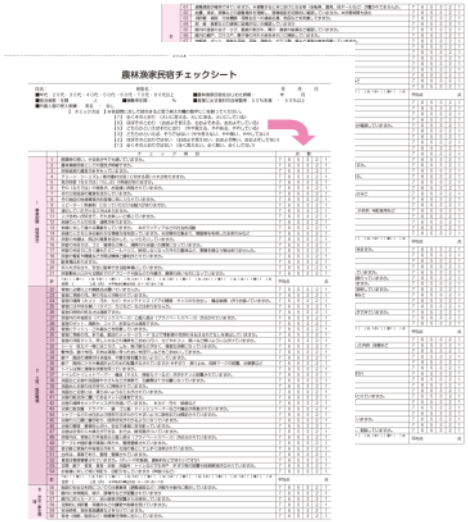
本文ｐ62～65

- 体験旅行等の受入農家のスキルアップや後継者の育成、さらには、外部人材の受入・活用等、「人を育てる」取組が不可欠。

“人材を育てる”挑戦

- ➢ 農家民宿等の運営に必要となる経営理念や衛生管理、安全対策等をまとめたマニュアル等を作成・活用する。
- ➢ 継続的な実践者を対象とした勉強会の開催や他の地域との交流等により、農家民宿等のリスク管理の向上とスキルアップを図る。

民宿の質の向上のためのハンドブック



自己診断チェックシート

体験学習等における危機管理マニュアル

２　人材を育てる②

本文ｐ62～65

“人材を育てる”挑戦

- 農家民宿等の運営に関して、旅館業法等の地域の実情に応じた柔軟な運用を行う。
- 地域内での人材の確保・育成にあわせて、Ｕターン者やＩターン者の都市部での生活経験を活かした人材を活用する。

グリーン･ツーリズムインターン制度（大分県）

- 教育旅行の受入れに興味のある家庭が試験的に新規に開業できる制度として、24年4月から導入。
- 開業しようとする者が希望すれば、１回に限り開業後１年間のうち４ヶ月未満の間は、手続きが簡易で手数料も安い旅館業法の季節的営業許可を受けて営業できるようにするもの。

都市人材の活用

- 集落の抱える課題を解消するため、都市人材を研修生等として活用。
- これらの人材がホームページ運営等の情報の受発信や、特産品の開発などで活躍。

３　魅力を伝える①

本文ｐ66～74

- 「いつ」、「どこで」、「何ができ」、「どうやって行くのか」等、地域の情報や農村の「魅力を伝える」ことが不可欠。

“魅力を伝える”挑戦

- ➢ インターネット上での情報の発信の充実・強化を行う。
- ➢ さらに、ＳＮＳの活用や、若者やメディア等の情報発信力を有効に活用する。
- ➢ 都市部住民が多く訪れる農産物直売所等を、情報発信の拠点として位置付けて取り組む。

安心院町グリーンツーリズム研究会の取組

- ホームページで、研究会の活動、農村民泊や地域の周辺情報について紹介。
- Twitterやスタッフブログ、Facebookとも連動し、常に新しい情報を発信。
- マスコミに対する働きかけや、紙媒体での情報発信も重視。

長崎県立大学「Siebo（シーボ）」による撮影風景
（おおむら夢ファームシュシュ）

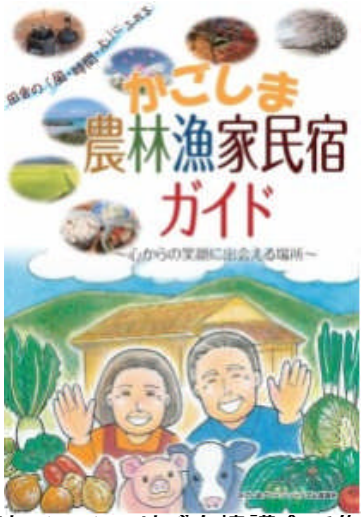
３　魅力を伝える②

本文ｐ66～74

“魅力を伝える”挑戦

- 農村側から積極的に都市に出向いてアピールする。
- 参加者を通じた多くの人への波及効果が期待できる農村へのモニター（お試し）ツアーを活用する。
- 九州新幹線全線開業を契機に、関西方面等への教育型旅行等の積極的なＰＲを行う。
- 増加傾向にあるアジア等からの旅行者をターゲットに観光業界や留学生等と連携したアピールを行う。

都市圏の消費者と九州の生産者をむすぶ「ふくおかマルシェ」



かごしまグリーン・ツーリズム協議会で作成している
「かごしま農林漁家民宿ガイド」

４　パートナーとつながる①

本文ｐ75～84

- 事務局体制の強化や、広域かつ多様な連携、農村を応援してくれるリピーターの確保など、ともに活動してくれる「パートナーとつながる」取組の拡充が重要。

“パートナーとつながる”挑戦

- 多様な関係者等との調整窓口となる事務局の立上げや機能強化を行う。
- 実践者同士の交流や相互訪問による情報交換等により、実践者のスキルアップ等に取り組む。
- 規模の小さな取組地域が連携することで受入規模を拡大する。

九州グリーン・ツーリズムシンポジウム2011in鹿児島での交流会（左）と作業体験の様子（右）

４　パートナーとつながる②

本文ｐ75～84

“パートナーとつながる”挑戦

- リピーター等と積極的に交流を深め、応援団やファンクラブを形成する。
- 旅行業者やＪＲ等と連携した商品開発やＰＲを行う。
- 体験学習や学校給食への地元食材の供給など、地元の学校と農家の交流を深めることにより、子ども達に農業に関心を持ってもらう取組を行う。

JR九州との連携で企画された「わくわく体験プラン」

給食食材の納入等を通じて食農教育活動を進めている
農産物直売所「ほたるの郷」

≪第3章で紹介している事例≫

【地域をみがく】

- ◆ 「村丸ごと生活博物館」（熊本県水俣町）≪ｐ56≫
- ◆ 「フットパス」と「九州オルレ」（佐賀県唐津市ほか）≪ｐ57≫
- ◆ 「おがわ四季御膳」（宮崎県西米良村）≪ｐ58≫
- ◆ 「高千穂の夜神楽」（宮崎県高千穂町）≪ｐ59≫
- ◆ 「日置市の尾木場集落」（鹿児島県日置市）≪ｐ60≫
- ◆ 「南島原ひまわり観光協会」（長崎県南島原市）≪ｐ61≫

【人材を育てる】

- ◆ 「鹿児島県及び大分県での対応」≪ｐ64≫
- ◆ 「高千穂町秋元集落の協議会スタッフ」（宮崎県高千穂町）≪ｐ64≫
- ◆ 「ふき活性化協議会」（大分県豊後高田市）≪ｐ65≫

≪第3章で紹介している事例≫

【魅力を伝える】

- ◆「安心院町グリーンツーリズム研究会」（大分県宇佐市）≪ｐ67≫
- ◆「おおむら夢ファームシュシュ」と「Siebo（学生）」との連携（長崎県大村市）≪ｐ68≫
- ◆「阿蘇くじゅう観光園」（熊本県阿蘇市ほか）≪ｐ69≫
- ◆「玄海みなとん里」（佐賀県唐津市）≪ｐ69≫
- ◆「ふくおかマルシェ」（福岡県福岡市）≪ｐ70≫
- ◆「京築連帯アメニティ都市圏推進会議」（福岡県京築地区）≪ｐ71≫
- ◆「かごしまグリーン・ツーリズム協議会」等（鹿児島県）≪ｐ72≫
- ◆「豊後高田市グリーンツーリズム推進協議会（大分県豊後高田市）≪ｐ74≫

【パートナーとつながる】

- ◆「一般社団法人まつうら党交流公社」（長崎県）≪ｐ75≫
- ◆「九州のムラたび応援団」≪ｐ76≫
- ◆「九州グリーン・ツーリズムシンポジウム」≪ｐ77≫
- ◆「阿蘇くじゅう観光園」（熊本県阿蘇市ほか）≪ｐ78≫
- ◆「五島列島ファンクラブ」（長崎県五島市）≪ｐ79≫
- ◆「夕日の里づくり推進会議」（宮崎県五ヶ瀬町）≪ｐ79≫
- ◆「ＪＲ九州」と「九州のムラへ行こう」の連携　≪ｐ80≫
- ◆「壱岐体験型観光受入協議会」と「農協観光」の連携（長崎県壱岐市）≪ｐ81≫
- ◆「西都市グリーン・ツーリズム研究会」（宮崎県西都市）≪ｐ82≫
- ◆「ほたるの郷」（佐賀県小城市）≪ｐ83≫
- ◆「川内野集落「コメＣＯＭＥ倶楽部」」（佐賀県伊万里市）≪ｐ84≫

【教育ファーム】≪本文ｐ24、25≫

- 自然の恩恵や食に関わる人々の様々な活動への理解を深めること等を目的とした「教育ファーム」について、九州各県の小・中学校を対象にしたアンケート調査結果をもとに、九州における取組状況や子ども達への効果を紹介。

【からいも交流】≪本文ｐ33≫

- グリーン・ツーリズムが政策として提唱される以前（昭和57年）から、九州南部で行われている「からいも交流」と呼ばれる農村部等における一般家庭での外国人学生のホームステイによる交流活動を紹介。

【子ども農山漁村交流プロジェクトにおける安全管理マニュアル】≪ｐ62≫

- 農家民宿等の受入地域で危機管理と安全対策を共有し活用できるよう作成された「安全管理マニュアル」を紹介。

【二地域居住と定住の促進による農山漁村活性化への期待】≪ｐ85、86≫

- 都市農村交流の一環として推進している二地域居住と定住の現状とその期待について、また、滞在型市民農園により都市と農村の交流を行い、農山漁村の活性化を図っている佐賀県唐津市の「おいでな菜園」や、大分県日田市の「クラインガルテンあまがせ」の事例を紹介。

≪参考資料≫

【「都市と農村の交流」の支援施策】≪ｐ88≫

- 「我が国の食と農林漁業の再生のための基本方針・行動計画」における都市農村交流の位置付けや国の支援策等を紹介。

【受入モデル地域（協議会）の設置状況一覧表】≪ｐ89≫

- 「子ども農山漁村交流プロジェクト」の受入モデル地域（協議会）を紹介。

【表彰事業等の実績】≪ｐ90～91≫

- 「食と地域の『絆』づくり」等の都市と農村の交流に関する主な賞を受賞した地域や団体を紹介。
- 地域のオピニオンリーダーであり自身の民宿経営に成功し地域の活性化に寄与している「農林漁家民宿おかあさん」100選の認定者を紹介。

【参考資料等の紹介】≪ｐ92≫

- 都市と農村の交流に関する参考資料として、各種情報サイトや「農林漁家民宿おもてなしハンドブック」等について紹介。

≪その他≫

【都市と農村の交流をめぐる年表】≪ｐ30、31≫

- 全国の先駆けとなる安心院町の農家民泊の開始等、全国及び九州の都市農村交流をめぐる動きを年表に整理。